



地域に先駆けた技術の導入・改善により大規模経営を実現 ～地域のリーダーとして産地への技術普及に尽力～

豊橋市 富田孝さん
果樹（モモ、カキ、クリ）

【平成28年10月20日掲載】

施肥改善、低樹高仕立て、せん孔細菌病対策など地域に先駆けた技術の導入・改善によりモモを主体とした大規模果樹複合経営を実現し、地域のリーダーとして自らが習得した技術を産地へ惜しみなく普及されている、豊橋市の富田孝さんをご紹介します。

モモ主体経営への転換を決断

富田孝さんは高校生の頃に実家の農業を継ぐことを決意し、県立農業大学校を経て、20歳で就農されました。当時は、カキ、クリ、養豚の複合経営でした。

就農した富田さんは、カキ「西村早生」を導入し、生産拡大に着手します。「当地域では『次郎』が主力品種であったが、有利販売できる『西村早生』が有望と考えた。『西村早生』は栽培が難しいが、農業大学校時代に農家研修で習得した技術を生かせると考えた。」と富田さん。水田転作やクリ畑の改植により、順調に「西村早生」の面積を拡大していきました。

ところが、5年ほど経つと、他県の産地から「刀根早生」が出荷されるようになり、競合する「西村早生」の価格は大きく下落してしまいました。「西村早生」の生産拡大を進めてきた富田さんにとっては危機的な状況でした。同時に、このことは大きな転機ともなりました。

どうするか悩んだ末に、将来を見据えて大きく方針を転換し、「モモは栽培に手間がかかるが、単価が安定している。」と、新たにモモを主体とした経営を目指したのです。そして、この決断が現在の富田さんの経営の礎となりました。



富田孝さん

大規模果樹複合経営を実現

モモ栽培に取り組み始めた富田さんでしたが、当初は収量や品質が安定せずに苦労しました。当地域の栽培技術が他産地に比べて遅れていたのです。

そこで、先進地を精力的に回り、優良事例を徹底的に研究しました。特に山梨県の事例は当地域にとって最も参考になりました。先進地で得た情報をヒントに、必ず自身のほ場で導入技術を試しながら、当地域に適するように改善を加えていったのです。こうした地道な積み重ねにより、数多くの技術が確立されました。

また、品種の特性調査にも尽力し、「栽培面積を拡大するためには、地域のブランド品種『勘助白桃』を中心として、作期の異なる品種を導入し、作業分散を図ることが必要。農業機械や雇用労力の有効利用にもつながる。」と、数多くの品種の苗を入手してはその特性を調査して、優

良品種の選定に努めました。

こうした取組により、富田さんはモモ 90 a、カキ 176 a、クリ 50 a という大規模果樹複合経営を実現することができました。

産地への技術普及に尽力

富田さんが自身のほ場で試行錯誤の末に確立した技術には、過剰施肥を是正して樹勢を適切に保つための「施肥改善」、作業性を改善するための「低樹高仕立て」、罹病枝の早期発見・早期切除による「せん孔細菌病対策」などがあります。特に、難防除病害であるせん孔細菌病対策については、長年の綿密な観察により、罹病枝の判断基準(春の芽吹きが悪い)を確立したことによって、早期発見・早期切除が可能になりました。

さらに、自らが習得した技術を惜しみなく産地へ提供するため、栽培講習会で自身の園地を率先して開放し、仕立て方法や罹病枝の切除基準などを実演を交えて説明しています。技術の普及に尽力する理由を尋ねると、「自分一人では産地は成り立たない。産地が発展していくためには、全体のレベルアップが必要。私のほ場は『地域の果樹試験場』と言われたりします。」という答えが返ってきました。祖父は農業高校の教員、父は農業改良普及員という富田さんに、脈々と受け継がれている指導者の精神を感じました。



栽培講習会

魅力ある産地づくりに向けて

富田さんは平成 11 年から長年にわたり J A 豊橋桃部会の部会長として、産地を牽引し続けています。この間には、選果場の移転・選果機の導入にあたり、地道に部会員を説得して回り実現にこぎつけるとともに、市場担当者の情報を基に統一の選果基準を定めるなど、地域のリーダーとして重要な役割を果たしてきました。リーダーとしての心構えについて伺うと、「常に産地の将来ビジョンを考え、みんなに明るい未来を示すことができるように心がけている。」と力強く語っていただきました。

今後に向けては、「これからも、魅力ある産地づくりに尽力したい。低樹高仕立てによる女性や高齢者にもやさしい産地、共同機械選果による出荷・調製労力の負担が少ない産地であることを積極的に PR して、定年帰農者などを新たに部会員として確保したい。」と熱く話していただきました。

追伸：富田さんのクリ畑は「豊橋のカタクリ山」と呼ばれ、一面にカタクリが植わっています。祖父の代から長年かけて自生の株を移植して作り上げたものです。富田さんはこのクリ畑を大切に受け継ぎ、カタクリの開花シーズン(3月中下旬)には無料で一般に開放しています。富田さんの地域貢献の取組は、農業という枠を越えて大きく広がっていました。



カタクリの花

執筆：農業経営課

取材協力：東三河農林水産事務所農業改良普及課